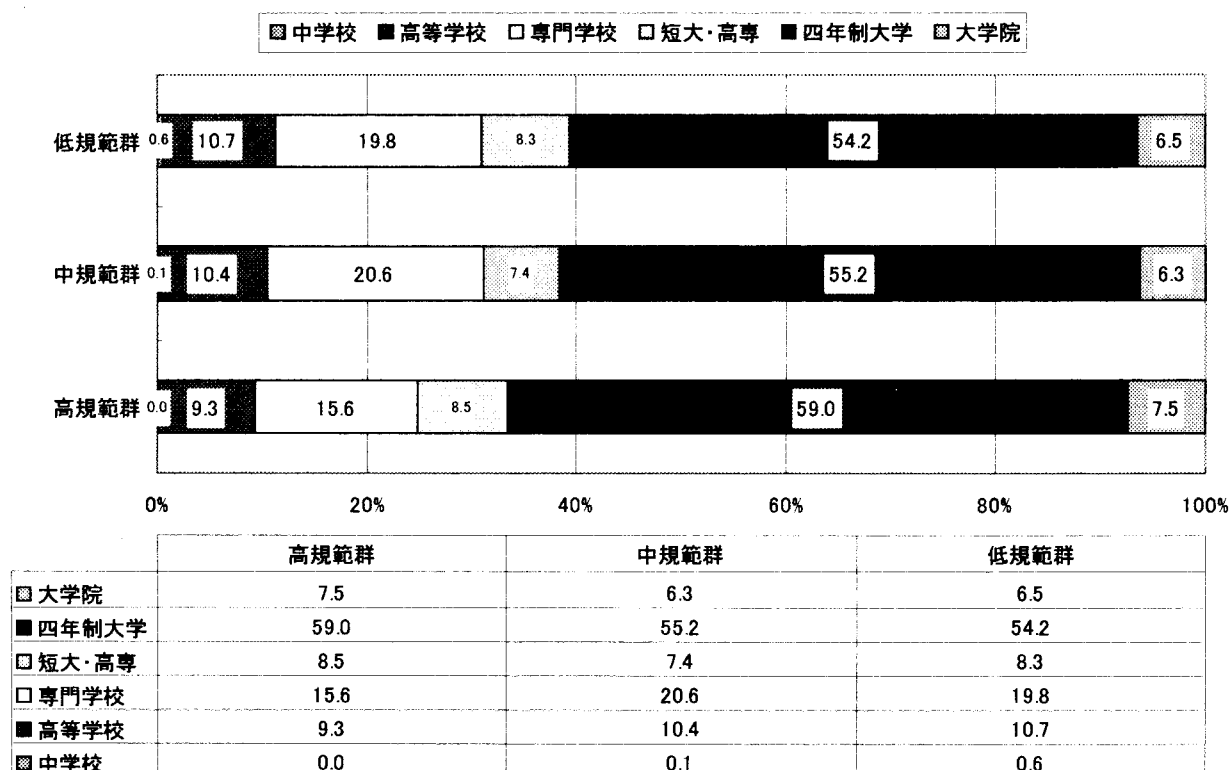


図5-5 最終進路希望×規範意識



第2節 逸脱行動と学校生活の満足度と不満

(1) 逸脱行動と学校生活の満足度

今、高校生は、日々の学校生活にどれくらい満足感をもって暮らしているのだろうか。

ここでは、逸脱行動と学校生活の満足度との関係、あわせて、学校生活での不満はどのようなことに起因するかを明らかにしたい。

表5-8「学校生活の満足度」は、高校生(N=2131人)の学校生活での満足感を4段階でたずねた結果である。それによると、16.3%が「満足」、42.7%が「やや満足」、28.3%が「やや不満」、12.7%が「不満」と回答している。「満足」と「やや満足」を合算すると「満足」派は6割(59.0%)、「やや不満」と「不満」を合算すると「不満」派は4割となり、学校生活満足派の方が多数派ということになる。

表5-8 学校生活の満足度(%) N=2131人 (男=1018人 女=1095人)

	満足	満足	やや満足	不満	やや不満	不満
全体	59.0	16.3	42.7	41.0	28.3	12.7
男	57.1	16.2	40.9	42.9	29.9	13.1
女	61.0	16.4	44.6	39.0	26.8	12.1

満足度と逸脱行動との関係はどうだろうか (図5-6)。

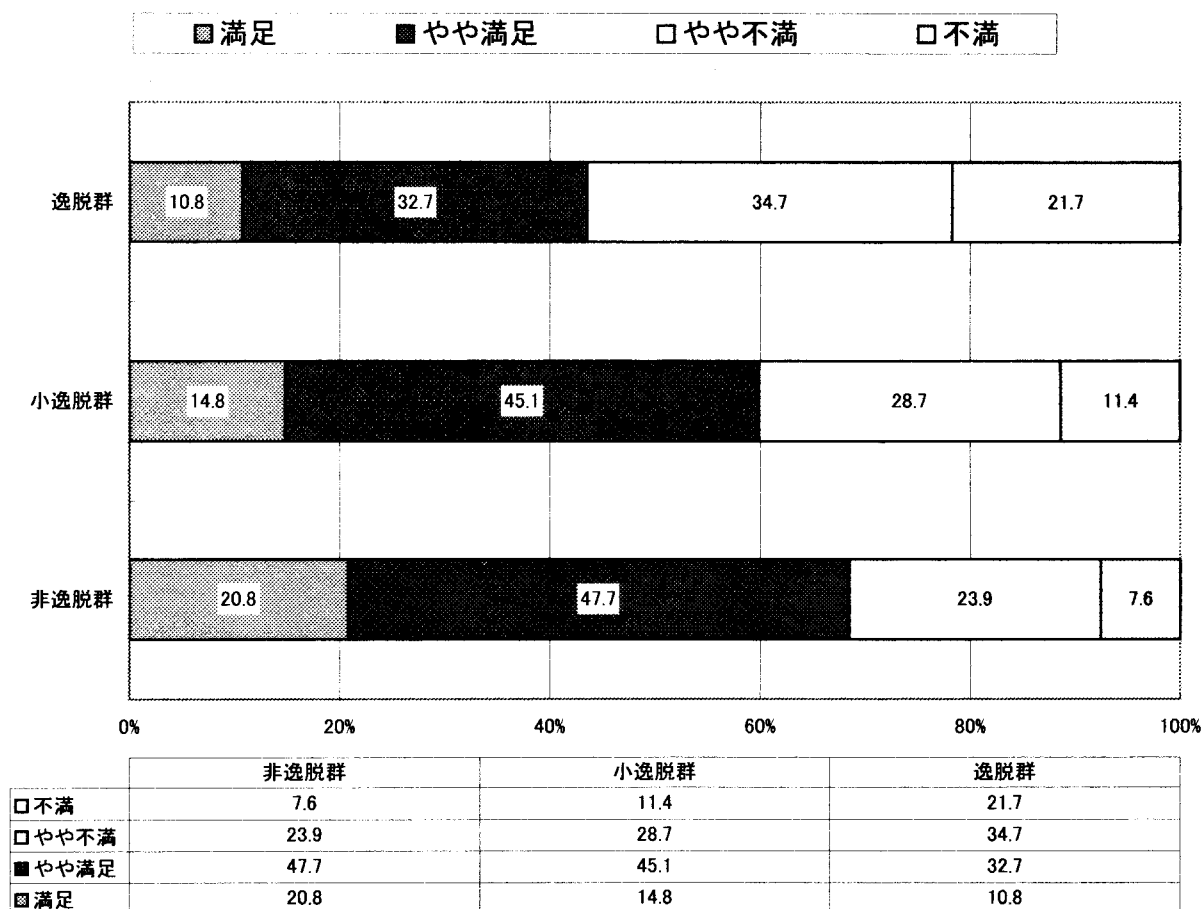
「満足」派についてみると、非逸脱群では2割(20.8%)、小逸脱群は14.8%、逸脱群は1割(10.8%)で、逸脱行動が小さい者ほど満足度が高い。「不満」派については逆に、逸脱群は2割(21.7%)を超えるが、小逸脱群は1割(11.4%)に減少し、さらに非逸脱群では1割以下にすぎない。

満足度と規範意識についてはどうだろうか (図5-7)。

規範意識3群についても逸脱行動とほぼ同様のことが言える。低規範群は2割強(22.0%)が「不満」を訴えているが、中規範群は9.6%、高規範群は9.5%と「不満」度は小さい。「満足」は高規範群に多く、「不満」は低規範群に多い。

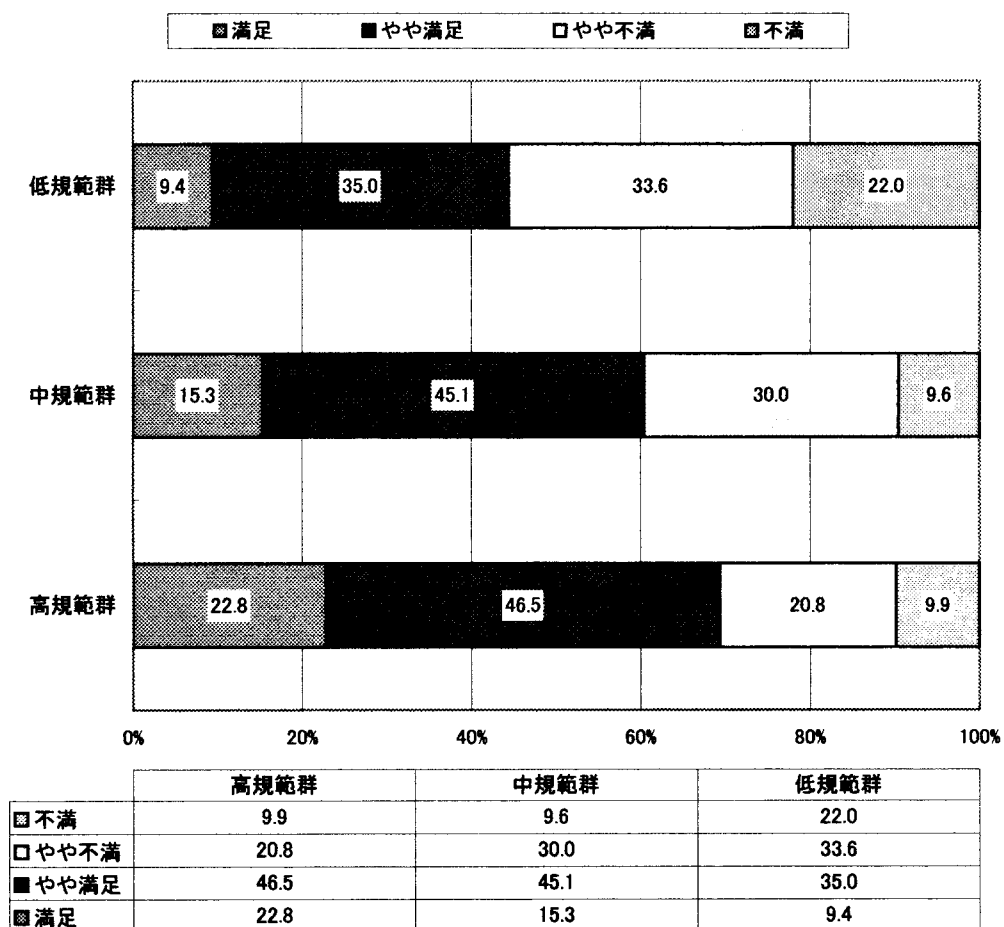
つまり、大きく逸脱した行動をとる者ほど学校生活の満足度は低く、不満度が高くなる。一方、逸脱行動をとらない者ほど満足度は高く、不満度が低くなる¹。逸脱行動と学校生活の満足度は相関関係があるといえよう。

図5-6 学校生活の満足度×逸脱度変数1 (%)



¹高野良子ほか「B. 高校生の生活と学業不振の背景に関する調査」代表坂本昇一『学業不振に陥った児童・生徒への対応に関する調査研究』平成5年度文部省「教育方法の改善に関する調査研究委託研究報告書」、pp.31 - 52の調査でも、生活のリズムの乱れや学校生活の充実感が成績に影響を及ぼしていることを指摘している。

図5-7 満足度×規範意識(%)



(高野良子)

(2) 逸脱行動と学校生活の不満

高校生の4割が学校生活に何らかの不满をもっていたが、その不满の中身は何だろうか。表5-9は、全員(N=2104人)に「学校生活で不满に思うこと」を10項目の中から選んでもらった結果である(複数回答)。不满の多い上位3位と不满の少ない下位3位を順に並べ、次に挙げておこう。

不满上位

1. 勉強がつまらない 48.1%
2. 嫌いな先生がいる 40.0%
3. 授業がわからない 33.7%

不满下位

1. クラスで無視される 0.7%
2. 友達から仲間はずれにされる 1.2%
3. 友達がない 2.7%

不满上位をみると、「勉強がつまらない」、「嫌いな先生がいる」、「授業がわからない」の3つがあげられる。特に、「勉強がつまらない」を不满点にあげた者が半数近くいる。興味深いことに、クラスの間関係や友人関係については不满が少なく、不满点は学習に関わることに集中してい

る。勉強・授業・先生が大きな不満要因を形成していることがわかる。

大学進路希望との関係はどうだろうか。

表5-9「学校での不満点」を見ると、不満上位の「勉強がつまらない」、「嫌いな先生がいる」、「授業がわからない」の3つは大学進学率と有意な差がある。例えば、「勉強がつまらない」と「嫌いな先生がいる」については、進学率が高いAランク校では37.6%と30.5%、低いCランク校では54.5%と47.3%である。大学進学希望の高い高校の生徒に不満度が低く、低い高校に不満度が高いという結果である。

表5-9 学校での不満点(全体・大学進学率)(%)

N=2104人

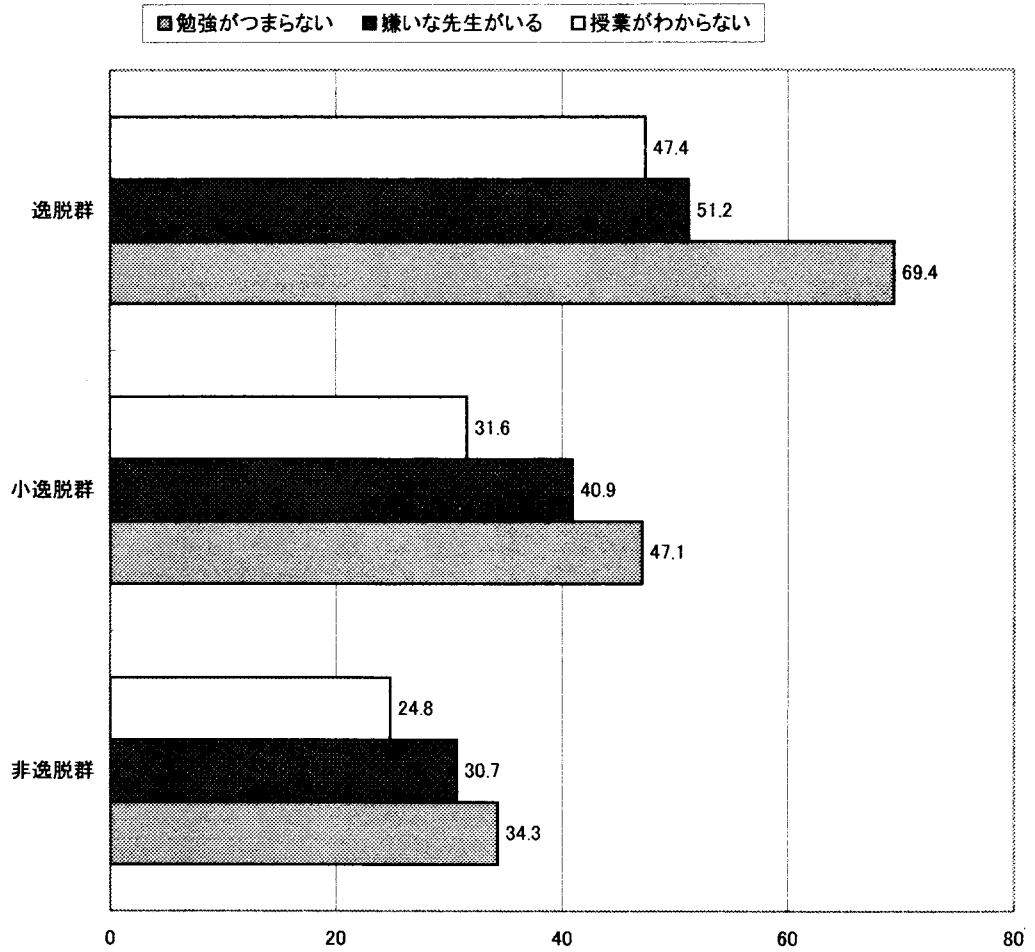
	全体	大学進学率ランク			
		A	B	C	D
授業がわからない	33.7	23.9	34.1	35.3	41.0
勉強がつまらない	48.1	37.6	47.7	54.5	52.7
部活動がつまらない	8.5	12.3	7.8	7.4	7.0
友達がいない	2.7	3.2	1.9	2.1	4.3
友達から仲間はずれにされる	1.2	0.5	1.1	1.6	1.8
クラスで無視される	0.7	0.7	0.6	0.7	0.7
嫌いな先生がいる	40.0	30.5	39.0	47.3	43.9
自分の持ち物をとられる	3.4	1.6	2.7	4.2	5.6
その他	23.2	24.1	24.2	23.2	20.7
特に不満はない	17.3	21.2	17.5	15.1	15.3

p=.000

逸脱行動との関係はどうだろうか(図5-8)。不満上位の「勉強がつまらない」・「嫌いな先生がいる」・「授業がわからない」は、非逸脱群(34.3%・30.7%・24.8%)に不満度が低く、逸脱群(69.4%・51.2%・47.4%)に不満度が高い。逸脱群の不満度は非逸脱群の2倍に達し、不満度が極めて高い点の特徴である。

また、高校生の2人に1人は「勉強がつまらない」と答えている。逸脱度の高い者に至っては「勉強がつまらない」は7割に及んでいる。「勉強がつまらない」を前提とした授業展開や教育方法のさらなる改善や工夫が教師には求められよう。

図5-8 学校での不満点上位×逸脱度変数1(%)



	非逸脱群	小逸脱群	逸脱群
□ 授業がわからない	24.8	31.6	47.4
■ 嫌いな先生がいる	30.7	40.9	51.2
▨ 勉強がつまらない	34.3	47.1	69.4